審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	（乙）第 2821 号	氏名	木﨑　潤也
審査担当者	主　査　八木　実 (印) 副主査　田中 永一郎 (印) 副主査　光山 慶一 (印)		

主論文題目：

Production of Ghrelin by the Stomach of Patients with Gastric Cancer

（胃切除術後のグレリン産生）

審査結果の要旨（意見）

胃癌術後患者では低栄養や体重減少を来すことが多く、QOL 低下につながりがちである。胃で主に産生されるグレリンは摂食ホルモンとして重要であるが、胃切除前後でのその動態は十分に解明されていないのが現状である。本研究は胃切除後の患者の血清グレリン動態と再建法との関連性を検討した興味ある論文である。本研究から 1）グレリン遺伝子発現量は胃の上部で多いこと、2）胃切除後のグレリン濃度変化は術式に関連なくほぼ同様の変化を示したこと、3）術後 9 か月以降では胃全摘群でも血清グレリン濃度が他の胃切群と差が無くなったことより、他臓器からのグレリン産生が推測されたこと、など示唆に富む所見が得られた。以上から本論文は学位論文にふさわしいと考える。

論文要旨

低栄養や体重減少は、胃癌術後の患者において QOL 低下となる重要な因子である。胃で産生されるグレリンは、食欲増進や脂肪蓄積を促す。本研究において、胃内グレリン mRNA の分布を明らかにし、胃切除術後の血清グレリン濃度変化およびグレリンと再建法との関連性を検討した。6 名の胃全摘後の胃より 7 か所正常粘膜を採取し、その正常粘膜より RNA を抽出し、total RNA(1 μg) より cDNA を合成し、Q-PCR により mRNA を定量化した。74 名の胃癌患者(total gastrectomy(TG), n=23; distal gastrectomy(DG), n=30; proximal gastrectomy(PG), n=11; pylorus preserving gastrectomy(PPG), n=10)において、ELISA 法を用い胃切除後の血清グレリン濃度を測定した。グレリン遺伝子発現量は、胃体部、胃底部、噴門部、前庭部、幽門輪の順で多かった。胃切除術後血清グレリン濃度変化は、すべてのグループで同様であった。術後 1、7、30、90、180 日目で、DG 群と PPG 群における血清グレリン濃度は、TG 群に比べ優位に高かった。しかし、術後 270、360 日目では、DG 群と TG 群との有意差は認めなくなった。胃全摘術後 9 か月頃より、他臓器からのグレリン産生が増えると推測される。したがって、術後 9 か月頃の栄養状態や体重を評価することが、患者の QOL 改善において重要である。